

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520372

研究課題名（和文） ビルマ文学史における日本占領期の研究

研究課題名（英文） The Study of Japanese Occupation in the History of Burmese Literature

研究代表者

南田 みどり (MINAMIDA MIDORI)

大阪大学・世界言語研究センター・教授

研究者番号：80116144

研究成果の概要（和文）：日本占領期（1942-45）は、文学史上見るべき作品のない「暗黒時代」であったと、ビルマ国内では位置づけられてきた。本研究は、日本占領期に出版された雑誌、単行本小説等を可能な限り収集した上で、第一に当時の文学が果たした役割をいくつかの側面から解明し、第二に作家協会機関誌『作家』の役割をも考察した。第三に、占領期にビルマ国内で活動した文学・出版関係者のリストと出版書籍のリストを作成し、今後の研への布石とした。また、日本占領期の遺産である検閲制度の現代文学への影響についても考察し、総じてビルマ文学史上空白であった日本占領期の意義と位置づけを明確にした。

研究成果の概要（英文）：It is said that the period of Japanese Occupation was 'the dark period' in the history of Burmese literature, for there were not any excellent work. First, this study made clear the role of fiction such as novels, short stories and dramas taken a side of propaganda, entertainment, satire, and enlightenment. Second, it made clear the role of "Writer", the periodical magazine for Burmese Writers' Association taken a side of the external feature, the construction, and contents. Third, it drew up the roster of Burmese writers who wrote books of articles in "Writer" involving those who took part in the Writers' Association and cultural activities in public organizations or those who operated publishing and printing business and so on. Furthermore it considered the influence of the inheritance of that period on the contemporary Burmese literature such as the censorship. It made clear the significance of the period of Japanese Occupation that left almost blank in the history of Burmese literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：東南アジア文学、ビルマ文学史、日本占領期、国際情報交換

1. 研究開始当初の背景

日本占領期(1942-45)の研究については、

現代史や政治学の分野で内外に若干の研究の蓄積があった。

一方文学研究においては、従来より、この時期を全体的に概観する十分な業績が内外ともに不足していた。

ビルマ国内の出版物は、総じて日本占領期を文学史上の「暗黒時代」ととらえてきた。それは、この時期に行われた検閲や、用紙不足や、空襲などによって、見るべき作品が創作されなかったためとされる。

そのみならず、現在に至るも、この時期の出版物が散逸し、収集が困難であることもまた、文学史研究の空白を生み出す要因となっていた。

ビルマ国内の日本占領期文学の研究は、戯曲、詩歌について若干の業績があるのみで、文学ジャンル上重要な位置を占める小説については、不正確かつ不十分な叙述が散見されるにとどまっていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一にわが国において、両国の過去を正しく認識することによって、両国の真の友好への知見を獲得することに貢献し、第二にビルマ側における文学研究の空白を埋めることに貢献することであった。

そのためには、日本占領期に出版された文学作品のリストの整備、作品の分析、作家協会機関誌の分析、作家の動向の整理などを行うことによって、占領期文学の全体像をとらえることを必要とした。

さらには、文学史上における日本占領期を位置づけるために、日本占領期の戦後ビルマ文学界に及ぼした影響等を考察することも必要となった。

3. 研究の方法

軍事政権下のビルマでは、現地との手紙やメールや電話のやり取りのすべてが介入を受けたため、現地における直接の聞き取り調査や資料収集が、本研究には不可欠であった。したがって研究期間中は、年に一度現地で資料収集と聞き取り調査を実施した。

それらの実施に先立ち、収集済みの資料の整理ならびに聞き取りのための問題意識の整理を行った。

現地調査後は、資料と聞き取り調査結果の整理を行い、それぞれの時点で整理した資料をもとに、まとめの論説を執筆した。

これと並行して、国立国会図書館や防衛省戦史資料室等において、日本占領期のビルマで出版されたビルマ語書籍や記事の原資料となる日本語や英語の文献の調査収集にも努めた。

4. 研究成果

はじめに

ビルマ国内における日本占領期文学に関する叙述は、おおむね、日本占領期が「暗黒

時代」であり、芸術としての文学の発展は阻害されたとしている。

その要因のうち、検閲の問題は重視されているかに見える。たとえば、「日本ファシズムの宣伝普及に資するものは自由に執筆することが許可され、用紙の手配が援助される一方で、国民の倫理観を麻痺させる退廃的文学が、直接間接的に奨励された」との記述もある。

しかしビルマ国内の記述の多くが、当時出版された書籍を丹念に読み取った上検証された結果ではない。この時期の正確な文学作品のリストがビルマ側の文献に見出せないことも、この時期の文学研究の困難さを物語る。

本研究は、当時出版された文学関係書籍の収集・分析によって、ビルマ側の叙述を再検討し、日本占領期ビルマ文学の全体像を明らかにするとともに、その戦後文学への影響を考察する成果を得た。

(1) 日本占領期のビルマ文学界

1942年8月にビルマ行政府が設置されると、ビルマ語が公用語に定められた。同年9月には、行政府に情報宣伝局が開設され、出版は日本軍の宣伝活動の一環と位置づけられた。宣伝の基本は、日本軍政を民衆へ浸透させること、すなわち大東亜戦争遂行の意義を理解させ、民衆を日本軍の行動に協力するよう導引することとされた。宣伝局は10月にビルマ語日刊紙『バマーキツ（ビルマ時代）』を発行した。

作家協会結成も宣伝活動の一環と位置づけられた。すでに作家協会は、1940年初頭に設立されていたが、自然消滅していた。ビルマ側は、この機に協会再建に動いた。1942年9月に協会は再建され、12月には機関誌『サーイーサー（作家）』が創刊された。

1943年8月の名目的「独立」後、行政府宣伝局は、ビルマ厚生省宣伝局に移行した。同年9月に、作家協会は文学賞の設置を決定し、1943年出版書籍のうち、小説部門で『刀』（ミンスエー1910-49）が、歴史部門で『三十人の同志』（ミヤダウンニョウ 1915-83）が賞を授与された。

英領時代には、ビルマ語小説やノンフィクションに賞が与えられることはなかった。占領期の文学賞にはこのほか、『Greater Asia』紙の「独立」記念短編小説コンテストや、パリー語育成協会賞などがあった。

作家協会はさらに、「ビルマ文学者の日」を年中行事と定め、1944年11月から12月にかけて、演劇上演や講演会や弁論大会を各地で開催した。

これらの文学賞授与や「文学者の日」記念行事は、今日に至るまで継承される。日本軍の宣伝活動の一環として「結成」された作家

協会は、対日協力を装いながらさまざまな機会を活用して、戦後文学への礎石をも築いたことになる。(論文⑦参照)

(2) 作家協会機関誌『作家』

占領期唯一の雑誌として愛読された『作家』の発行の目的は、「大衆雑誌を刊行し索漠たる民衆を啓発すると共に日本文化を紹介する」ためとされた。

しかし、作家協会結成が必ずしも日本軍「指導」の帰結ではなかったと同様、同誌の創刊にも、編集・発行にかかわった作家たちのさまざまな思惑が存在していた。

1942年12月発行の創刊号から存在が確認できたのは、1944年6月—7月発行の11号までである。全11号の収録記事は300点ある。その内訳は、小説49(3)点、童話等11(4)点、詩歌26(2)点、論説・記事164(41)点、作家協会関係50点である。()内の点数は、日本関連記事の内数である。

日本関連の論説・記事では、おおむね日本の経済的発展や、緒戦における軍事的優位を紹介しながら、それらを支えた精神的背景としての日本文化や教育の力を強調することに重点が置かれていた。

ビルマ関連の論説・記事は、日本関連のそれを圧倒的に上回る。ビルマ関連の論説・記事の中では、時事・戦争関連が多く、45点にのぼる。それらは、ビルマ軍自身、あるいはそれを支持する立場からの発信である。それらは、ビルマの「独立」やそれを契機とする新たな「国家再建」への全国民の協力を促した。また、論説・記事中、ビルマ関連の歴史・文化関連記事22点は、ビルマ人にとっての過去と現在を確認させるものであった。

ビルマ関連論説・記事で最も多いものは、作家協会関連記事であった。それらは、協会の活動目的や同誌の編集方針を示すのみならず、協会の活動上の必要事項を伝えた。同誌は、戦時下の生活破壊の中で、読者の中心をなす会員作家を組織結集する作家協会情宣活動の鍵をも担った。

同誌に与えられた民衆の啓発と日本文化紹介という二つの役割のうち、同誌は記事の六分の一を占める日本関連記事によって後者の役割を適度に果たし、残る六分の五を占めるビルマ関連記事によって、前者の役割を存分に果たした。

すなわち、「民衆の啓発」との名目の下で、同誌は、第一にビルマ人の誇りや自覚を促す啓蒙的役割を果たした。それは第二に、日本軍のプロパガンダを最小限に抑え、ビルマ軍への協力によってビルマの真の独立獲得を目指すという、ビルマ軍のプロパガンダ的役割をも果たした。(論文⑥参照)

(3) 日本占領期の文学作品

①「プロパガンダ」的役割が期待された小説
1943年に『Greater Asia』紙が「大東亜共栄圏におけるビルマの役割」とのテーマで行った短編小説コンテストの受賞作は、「ボウ・アーシャ」(シュエーペイントウン 1908—61)であった。

そのタイトルは、ビルマ独立軍将校である主人公の愛称で、作品は彼が村娘と出会い、求婚し、結婚するまでを綴る。作者は、主人公と村娘との会話や書簡に、「大東亜共栄圏建設と大東亜戦争遂行の意義」を語らせ、作品に期待される役割を果たすことに務めた。

しかし、作者は序文で、これが「会心の作」ではないことを吐露している。さらに、『作家』責任編集者ジャーネージョー・ウー・チマウン(1912—46)も序文を寄せ、そこでこの作品がさまざまな制約を受けた小説で、ただの作品ではないゆえ、細心の注意で読むよう読者に断っている。

序文と作品を丹念にあわせ読めば、これが心ならずも書かれた不本意な作であり、作品出版の目的は、日本の宣伝政策にビルマ作家が「協力した」という既成事実作りであったことがうかがえる。

一方、作家協会の文学賞を小説部門で受賞した『刀』の成立過程は、「ボウ・アーシャ」とは異なる。作者ミンスエーがこの作品を書いたのは、大東亜共栄の理想への共鳴というよりむしろ、「日本精神」の美しく有意義な死への共鳴という内的衝動によるものであった。

主人公は、由緒正しきビルマ族の伝家の宝刀の所持者で、開戦前に外国から舞い戻り、親英派を葬るテロリストとして活動し、後にビルマ軍将校となる。

ミンスエーは、大戦前の作品でも主人公を親日的人物としているが、この作品でも主人公に、生きて虜囚の辱めを受けるより、抵抗と玉砕を尊重する武士道精神を説かせ、「独立」の喜びに沸くラングーンで、満身創痕の主人公をさらなる戦闘へと立ち去らせる。

ミンスエーはこのほかにも、日本占領期にユーモア小説やプロパガンダ小説を書いた。後者で彼が強調するのは、「国家」への献身である。ここでいう「国家」は、日本ではなく彼の祖国ビルマをさす。彼は「日本精神」をビルマの「国家」建設の精神的支柱として転用することを促した。

これらのことは、「プロパガンダ」的作品が、必ずしも日本軍の宣伝に資することを目的に書かれたわけではなかったことを明示している。

②文学の娯楽的役割と啓蒙的役割

日本占領期に出版された単行本長編の多くは、悲恋恋愛小説、ユーモア恋愛小説、ミステリー小説などの娯楽作品であった。その書き手は、前述のミンスエーのほか、同様に

戦前から活躍していたヤンアウン（1903－94）やザワナ（1911－83）やトゥカ（1910－2006）やメーミョ・マウン（1910－98）やマハースエー（1900－53）などであった。

その中には時代背景が明確に示されない作品もあるが、巧みな世相風刺がちりばめられた作品も少なくない。それらは、ビルマ人の「倫理観を麻痺させる」よりむしろ、普遍的な人間の尊厳や誠意を描き、戦時の厳しい生活の中でつかの間の慰めや生きる勇気を読者に与える役割を果たした。

このほか、ビルマ人の意識向上を意図的に目指した啓蒙的作品もある。それらは、マウン・ティン（1909－2009）の2編の戯曲、ゾージー（1907－90）やニャーナ（1902－69）による戯曲のほか、ニャーナの中篇小説、ウー・ヌ（1907－94）の長編小説である。

そこでは、ビルマ人の暗愚や不団結が植民地化を招いたとされ、ビルマ人の意識改革と団結が「真の独立」の武器となることが強調されている。

これらの作品では、日本軍との協力や大東亜共栄の重要性は語られない。書き手たちは、作品を日本のプロパガンダに資することを潔しとせず、ある者は娯楽作に徹してプロパガンダを回避し、ある者は行間にビルマ人の意識改革と団結を目指すメッセージをしのばせ、作品をひそかな抗日「プロパガンダ」に利用したといえる。

③日本軍将兵とビルマ軍将兵の形象化

戦後小説には、「ファシズムの権化的」日本人や「友好的」日本人が登場するが、日本占領期の作品には明確な顔と名前を持つ日本人像の形象化は、現在のところ見出せない。

そのような日本人像が描かれなかったことは、書き手たちが検閲を考慮したとの推測も成り立つ。

ただ、漠然とした日本人像はいくつか散見される。それらは、メーミョ・マウンがシュエアーの別名で書いた2編の悪漢ユーモア小説、アウントゥーやジャーネージョー・ママレー（1917－82）の長編小説に見られるものである。いずれもその形象は美化されておらず、むしろ醜悪滑稽なものとなっている。

このような作品の出版を、日本軍の宣伝活動の一環として許可し、希少な用紙を提供させた人物とは何者であったのか。

検閲者が日本軍の宣伝に資する立場から作品を精査したとは考えにくい。また少なくとも検閲者の一人が、ビルマ的立場を堅持したビルマ人であったことも、いくつかの証言からあきらかとなっている。

ところが、このことは別の問題を提起している。すなわち、検閲者の関心事は日本軍将兵の形象化よりむしろ、ビルマ軍将兵の形象化にあった。ゆえに、ビルマ軍将兵の否定的側面を描いた作品は、占領中出版の日の目を

見なかったのである。これは、終戦直後に出版されたジャーネージョー・ママレーやマハースエーの小説の序文が証言している。

なお、『作家』掲載短編小説においては、ビルマ軍将兵を主人公とした作品が多数登場し、ビルマ軍のひそかなプロパガンダ的役割を担った。恋愛もの、冒険もの、ミステリーものも掲載されたが、いずれも娯楽的役割よりむしろ、長編小説をしのぐ顕著な啓蒙的、風刺的役割を担った。（論文⑦参照）

(4) 日本占領期の文学・出版関係者

この時期の文学・出版関係者の動向は多岐にわたる。彼らのうち少数の者は国外に拠点を求めたが、大多数は国内にとどまった。それら大多数の中でも、英領時代同様に執筆や出版に係り続けた者がいる一方で、ペンを置いた者もいる。さらには、日本軍が設置した組織において勤務あるいは活動した者もいれば、それらに一切かかわりを持たなかった者もいる。

『作家』掲載記事の執筆者、新刊書籍の著者、作家協会や出版業やそれにかかわる政府機関において活動・業務にかかわった者は、182名を確認している。

そのうち著作が多数の作家が10名いる。10名のうち2名は、現在のビルマで発行される人名録に名前が掲載されていない。また、182名のうち実在が確認できない作家が28名いる。

出版・印刷会社の経営に従事した作家も9名見出される。うち3名は上述の著作多数の10名に含まれる。

日本占領期において、出版事業は日本軍の宣伝活動の一環であった。しかし、出版物の多くが日本軍の宣伝ではなく、ビルマ人の民族精神の昂揚やビルマ軍への協力やビルマ人の意識向上を意図したものであった。

ただし、それらは日本軍の文化政策の基本を逸脱したものではなかった。日本軍の文化政策の基本とは、第一に文化的にイギリス色を払拭し、第二にこれに代わって日本文化を普及し、第三にあわせてビルマ文化の振興を企図することとされた。

ビルマの出版界は、上記の政策の基本のうち、第一を基本に据え、第二を名目的に利用しつつ、第三のビルマ文化振興を重視して、検閲と用紙不足の狭間で、獲得した機会を十分活用したのである。（論文①参照）

(5) 日本占領期の遺産

ビルマ国内の記述において悪名高い日本占領期の検閲制度は、1962年に登場した軍事官僚独裁政権であるビルマ式社会主義の時代に復活した。日本軍が創設したビルマ軍が検閲制度をも継承したことになる。

1988年に登場した新たな軍事政権のもと

で、検閲制度はさらに厳酷となった。それは年を追って、厳酷の度合いを増してきた。たとえば、青少年の「退廃」の問題を取り上げた論説が、1997年に検閲を通過したにもかかわらず、1998年の再版時には一部削除がなされた。(論文②参照)

また、1985年から1999年に雑誌等に掲載された21名の女性作家の短編小説が、2006年に短編集として出版されるに当たり、2名の作品は削除され、残る作品も10箇所にあたる削除があった。

削除された箇所は、ビルマ国内では周知の非政治的な日常の断片の描写であった。(論文⑤参照)

検閲の問題は、日本では不朽の名作とされる『ビルマの堅琴』のビルマ語版からもうかがえる。

竹山道雄の日本軍将兵への鎮魂の情意から書かれた『ビルマの堅琴』は、ビルマ人の視点から見れば受け入れがたい点が多数存在する。

たとえば、僧侶が堅琴を演奏することは戒律違反であり、主人公に僧衣を提供する山上の人食い人種はビルマには存在しないものである。その他、ビルマ人やその文化の描写も事実に反するものが少なくない。

ビルマでは1973年、1975年、2002年にビルマ語版が出版されている。そこでは、竹山のビルマ認識の欠落に起因する部分の多くが大幅に改変され、ビルマ文化に理解の深い日本兵たちが語る物語として、作品が生まれ変わった。

改変は翻訳者の意志というよりも、むしろ検閲側の意志と受け取れる。それはビルマ文学界において削除あるいは改変が日常化している事実の延長線上に生じた出来事として受け止めるべきである。(論文③参照)

おわりに

日本占領期のビルマ文学は、ビルマ作家がしたたかに日本軍とかわりながら、戦後文学へと布石を打っていくさまを示した。それはまた、ビルマ作家とビルマ軍あるいは「独立」ビルマ国家との緊密な関係をも提示した。

ビルマ軍の対日協力の「汚点」は、ビルマ正史においては、1945年3月のビルマ軍による抗日蜂起の「栄光」によって、不問に付された。

しかし、ビルマ国内における『作家』に関する叙述の歯切れの悪さや、日本占領期の資料収集の困難さは、「対日協力」の問題の厳正な検証がいまだなされていないこととかわりを持つ。

日本占領期の検閲にビルマ人やビルマ軍が関与していることと、実名が確認されない作家が多数存在することもまた、かわりを持つ。それは「日本軍」による検閲対策とと

らえられる一方で、対日協力の証拠隠滅の意図が存在した可能性が考えられるからである。

これらの問題は、日本占領期に出版された書籍、刊行物の収集が完了した暁に、再検証する必要がある。

このこととも併せ、本研究では敢えて除外した抗日闘争とのかかわりから占領期文学を検証する作業をも含めて、今後の課題としては、終戦直後の1940年代後半の出版物を中心に日本占領期を照射し、日本占領期文学の戦後への継承をさらに考察することによって、悪しき遺産としての検閲のゆくえにも着目することなどが考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7件)

- ① 南田みどり、ビルマ作家たちの「日本時代」、査読有、大阪大学世界言語研究センター論集、第7号、(2012)、285-311
- ② 南田みどり、ルードゥ・ドー・アマーとは何者か、査読無、アジア現代女性史、第7号、(2012)、6-27
- ③ 南田みどり、ビルマ語版『ビルマの堅琴』は何を語る？、査読有、世界文学、No.113、(2011)、29-41
- ④ 南田みどり、日本占領期におけるビルマ作家協会機関誌『作家』の役割について、査読有、大阪大学世界言語研究センター論集、第5号、(2011)、29-58
- ⑤ 南田みどり、短編小説の語るビルマ文学最前線、査読有(招待)、EX ORIENTE、Vol.17、(2010)、29-58
- ⑥ 南田みどり、児童小説『ビルマの堅琴』考～日本占領期ビルマ文学研究の視点から、査読無、日本翻訳家協会、No.190、(2010)、3-4
- ⑦ 南田みどり、日本占領期におけるビルマ文学—小説の役割を中心に—、査読有、大阪大学世界言語研究センター論集、第3号、(2010)、1-28

[学会発表] (計 2件)

- ① 南田みどり、『ビルマの堅琴』考～日本占領期ビルマ文学研究の視点から、日本翻訳家協会総会第25回翻訳研究フォーラム、2010.4.24、学士会館(東京都)
- ② 南田みどり、21世紀とビルマ文学の未来、大阪大学言語社会学会総会記念シンポジウム「世界文学の最前線」、2009.7.30、大阪大学箕面キャンパス

〔図書〕（計 1 件）

- ① 南田みどり、大同生命国際文化基金、テイーパーミン短編集、（2010）、260

6. 研究組織

(1) 研究代表者

南田 みどり (MINAMIDA MIDORI)

大阪大学・世界言語研究センター・教授

研究者番号：80116144